

## 第 7 回市史講座ミニレポート：平成 30 年 10 月 20 日（土）

### 「星上寺大餅行事の変遷—中世から近現代まで—」

講師：喜多村理子先生（新鳥取県史編さん委員会委員）



喜多村先生は、出雲地方東部に伝承されている「おもつつあん」と通称される民俗行事について講演されました。

はじめに「おもつつあん」の全般的な説明をされ、続いて、中世から今に至るまで引き継がれ、毎年、正月行事として行われている松江市八雲町星上山の「おもつつあん」について、史料に基づき詳細にお話しされました。

「おもつつあん」は、寺院の修正会（しゅうせいえ）・修二会（しゅうじえ）（仏教寺院で行う法会で、毎年 1 月に前年を反省し、悪を正し、新年の安泰を祈り、五穀豊穡を祈願する）と民間の豊作祈願の「オコナイ」と云われる信仰が結びつき、年頭に行われる行事の一つです。「オコナイ」は西日本各地で盛んに行われ、滋賀県の琵琶湖北岸および甲賀地方に多く分布して

いるそうです。12 世紀前半成立の『今昔物語』や 984 年成立の『三宝絵』などにもこの行事が「オコナイ」と記録されており、出雲で行われる「おもつつあん」は、まさにこの「オコナイ」です。出雲地方では、この行事に「オトウ（御頭・御当・御塔・御禱）」「大餅神事」「伽藍さん」「オコナイ」「おもつつあん」等々、色々な呼び名がついています。

喜多村先生はこの行事について記した詳細な史料を入手し、それを丹念に解読分析され、今に続く星上寺の「おもつつあん」行事の歴史の変遷を解説されました。その史料は八雲町東岩坂本郷の神主が記録した「星上大餅御当年請取渡シ書記帳」で、寛文 6 年（1666）から平成 10 年（1998）まで、星上寺に大餅を奉納奉仕する座と名（みょう）と当人の名前を書き継いだ 332 年間余の記録だそうです。

星上寺の「おもつつあん」は、松江市指定の無形民俗文化財である秋鹿の大日堂の御頭行事より古いと伝承されています。喜多村先生はこの史料によって、星上寺へお餅を奉納する岩坂地区ではトウニン（その年の担当）の地区が「座」で分けられ、更に座の中が「名」で区分されており、現在もその区分けの名残を引き継いで組をつくり行事が行なわれていることを解説されました。

「座」「名」は、近世期に設定された村切り（近世村の成立）以前、中世にさかのぼる地域の区割りです。「名」は荘園や国衙領の年貢収納単位で、名の住民は領主が年中行事や法会・神事を行なう際に公事や夫役をしました。「名」は戦国時代を経て、太閤検地で完全に消滅し、近世村落が成立しました。しかし、岩坂地区では、「オコナイ」の実施単位が近世村落・現代の自治体村落の枠を越え、今もかつての「名」単位で行なわれており、この「おもつつあん」が中世にさかのぼる行事であることを物語っています。

現在では、実施地域でも廃止したり合流したりし、縮小していく状況にあります。江戸・明治・大正・昭和前期・昭和後期と時代が移り、当初は奉納の大餅も 6 枚であったのが、4 枚、3 枚、現在は 2 枚と縮小し、餅 1 枚の重さも、近世期には 5 斗 5 升から 7 斗 7 升であったのが、明治期には 1 斗 2 升になり、現在では 1 枚が 4 升になったそうです。また、以前は、共有田（塔田）で耕作した米で大餅を作っていましたが、戦後の農地解放で共有の塔田を失い、今では各家から持ち寄りの米で大餅をついているとのこと。トウニン宿も、各組のトウヤ制が廃止されたため、集会所が宿となっています。

このように、時代によって変化しながらも、星上寺の「おもつつあん」は続いています。

この他、出雲地方にはオコナイ行事が実施されている地区として、

- 鹿島→多久神社
- 大庭→浄音寺・神魂神社
- 大草→六所神社境内社天神社
- 薦津→阿弥陀堂
- 竹矢→大門稻荷社・手間天神
- 八幡→平浜八幡宮
- 東津田→鷹日神社
- 邑生→月光寺
- 穴道小松→宇田比神社
- 嵩山→布自岐美神社

があるそうです。

喜多村先生は最後に、これらの伝統行事も、人々が関心を持ち、行政やマスコミなどから光が当てられないと、次第に衰微し消滅の危機がある、と警鐘を鳴らされました。